

矢嶋家

矢嶋家は高山にやってきたときから、すでに高山でも有数の豪族であった。金森家の当主である金森長近（1524-1608）の要請により、近江国（現在の滋賀県）から高山に移ってきた。長近は幼少期の一部を近江で過ごしており、金森家は矢嶋家と親しかったと考えられている。1585年に高山を支配した長近は、新たな城下町づくりのために矢嶋家を招いた。

矢嶋茂右衛門（?-1673）は高山の初代町奉行となり、金森家が支配していた広大な森林の管理を特別に許可された。矢嶋家の立場は、急成長する町に大きな影響力を持っていたが、やがて高山の商人地区が3つに分かれ、町奉行職もそれぞれに設けられた。一之町は矢嶋家が、二之町は川上家が、三之町は矢貝家が担当することになった。

矢嶋家と金森家の関係は、社会的なもの以上のものであった。矢嶋家は金森家が定めた法が一之町の人々に守られるようにする役割を担っていた。しかし、1692年に金森家が徳川幕府によって高山を追われると、矢嶋家は金森家には加わらず、幕府が任命した高山の新体制の代官として一之町の運営を続けた。

矢嶋家は、幕府の支配下にあったこの地域の森林を扱っていたが、1804年には塩の販売にも進出し、1840年には、木材に代わって塩が最大の商売となった。販売していた塩のほとんどは富山と美濃国（現在の岐阜県南部）から仕入れた海塩であった。展示室3は、塩を保管していた土蔵の中にある。1783年に建てられ、1878年に大修理が行われた。

矢嶋家は、1868年の幕府滅亡により、世襲の家督相続などの特権を失った。その後、他の商売にも手を出し、結局高山を離れた。昭和（1926-1989）初期には商社に土地を売却した。数十年後、高山市が土地を取得し、現存する蔵は高山まちの博物館として再利用された。